

序文

「災害で残されたもの」に向き合う—遺体・魂・遺産

編者 Sébastien P. Boret, Toshiaki Kimura, Elisabeth Anstett

本特集は、2020年2月19日から22日にかけて、東北大学災害科学国際研究所 (IRIDeS) で開催された国際ワークショップ「The Practices and Ethics of Dealing With Disaster Remains and Cultural Heritage」で発表された論文をまとめたものです。参加者は、国内外の学者、学生、アーティスト、市民など。映画、プレゼンテーション、展覧会、パフォーマンスなどのケーススタディを発表しました。講演者と聴衆は、身体的、精神的、物質的な災害遺物＝「災害で残されたもの」を救出し、保存するための実践的なプロセスを探求しました。また、これらのプロセスが集団のアイデンティティや表現、集合的記憶、コミュニティの絆、教育や知識に与える影響を紹介し、より広い倫理観について議論しました。

本特集は、ワークショップの構成を踏襲し、3つのセクションで構成されています。第1部では、災害後の社会における遺体というデリケートな問題に取り組みます。Elisabeth Anstett氏 (CNRS、フランス) は、災害時における遺体の取り扱いの難しさについて包括的な見解を示しています。Anstett氏のアプローチには、大量死の状況下で、不在、身元不明、不完全な遺体を扱うという実務的・法的問題が含まれています。問芝志保氏 (東北大学) は、関東大震災後の東京を中心とした地域における埋葬システムの変容を分析しています。最後に、Sébastien P. Boret氏、木村敏明氏、佐々木博之氏 (東北大学) の共同論文では、2011年の東日本大震災の被災者の遺体管理というデリケートな問題を、特に仮設の遺体安置所と埋葬の問題を中心に再考しています。

第2部では、社会が災害犠牲者の精神的な残響＝魂をどのように扱っている

かについて幅広く議論します。大村哲夫氏（東北大学）は、2011年の津波で命を奪われた学生の死後卒業という現象を取り上げ、死後の結婚や子育てとともに、これらの卒業式が若者の社会生活の期待されたサイクルを完結させる手段として機能していると説明しています。2番目の論文は、スハディ（ガジャマダ大学、インドネシア）によるもので、インドネシアのアチェとジョグジャカルタの住民による魂の管理について論じています。また、ムラピ火山の噴火の際に宗教家が亡くなったことを取り上げ、災害における死の意味を探っています。谷山洋三氏（東北大学）の3つ目の論文は、東日本大震災における宗教的チャプレン運動の誕生について論じたものです。

第3部では、災害時の人間以外の遺物の問題を取り上げます。小谷竜介氏（文化遺産防災センター）は、災害後の遺物の生活について興味深い議論を展開しています。小谷氏は、津波の瓦礫の中から回収された、獅子舞に使われた3つの面の事例を取り上げました。工藤氏（国立民族学博物館）は、震災後のネパールにおいてグブシの新居住地の構想から実現までの過程を検証し、村人との話し合いが不十分だったために、当局やNGOがゴースト・セトルメントを建設し、村人が意味や機能を与えるのに苦労したことを明らかにしました。

結論として、この論文集では、社会文化の変化のベクトルとしての災害の代理性、災害後の遺物の生成、そして災害に対する人間の反応をめぐる倫理的問題を明らかにしています。災害で残されたものは過去の遺物ではなく、新たな課題と機会をもたらす新しい存在であると考えられるべきであるのです。